

# 日本婦道記

梅咲きぬ

山本周五郎

青空文庫



「どうかしたのか、顔色がすこしわるいように思うが」

なおてる  
直輝の気づかわしげなまなざしに加代かよはそつと頬をおさえながら微笑した。

「お眼ざわりになって申しわけがございません、昨夜とうとう夜を明かしてしまったものでございますから」

「どうして、なにかあったのか」

「……はあ」

加代は腫はれぼつたい眼もとで恥ずかしそうにちらりと良人おつとを見

あげた。病身というほどではないにしても、骨ぼその手弱たおやかなからだつきで、濃すぎるほどの眉にも臙脂べにをさしたような朱い唇あかくちもとにも、どこかしらん脆もろい美しさが感じられる、直輝は妻の眼もとを見て頷うなずいた。

「そうか、歌か」

「はい、寒夜の梅という題をいただいているのですけれど、どう詠みましても古歌に似てしまいますので」

「一首もなしか」

「明けがたになりましたよ、ようやく」

「それはみたいな」

直輝は袴はかまの紐ひもを、きゅつとしめながら云った。支度がすんで居

間へもどると、茶を点<sup>た</sup>てて来た加代は、羞<sup>はじ</sup>をふくみながら一枚の短冊をそつとさし出した。

「おはずかしいものでございます」

直輝は手にとつて、くりかえしくちずさんでいたが、やがてしづかに天<sup>てん</sup>目<sup>もく</sup>をとりあげて妻を見た。

「一昨日であつたが、横山が妻女のはなしだといつて、お前にはもう間もなく允可<sup>いんか</sup>がさがるだろうと申していたが、そのようなはなしがあるのか」

「はい、ついせんじつそういうご内談はございました、ですけれどまだわたくしは未熟者でございますから」

つつましく眼は伏せたけれど、そつと微笑する唇もとには確信

の色があつた。

「允可がさがつたら歌会でも催すかな」

そう云つて直輝は立つた。隠居所へゆくと母のかな女じよは古い小こ切ぎれを集めてなにかはぎ縫いをしていた。

「母上とじようただいま登城とじようをつかまつります」

「ご苦勞でございます」

かな女はめがねをとり、会釈をかえしてから見送るために座を立つた。

家扶、家士たちと共に、直輝を玄関に見送つたかな女は、嫁と廊下をもどりながらその顔色のすぐれないことに眼をとめた。加代は良人に問われたよりも心ぐるしそくに、

「つい夜更かしをいたしまして」

と低いこえで答えた。

「そういえば、あなたのお部屋の窓にいつまでもあかしがうつっているの、お消し忘れではないかと思いました」

そう云ってかな女はふと嫁の眼を見た。

「それで歌はおできになりましたの」

「……はい」

加代はどきつとした。夜更かしをしたといえは歌を詠んでいたということはずぐにわかる筈ではあるが、その時は妙にふいをつかれた感じだった。

「しばらくあなたのお歌を拝見しませんからご近作といっしよに、

持つて来て拝見させて下さらないか」

「御覽いただくようなものはございませんけれど」

予感というのであろう、加代の心はつよく咎められるような不安を感じた。かな女は部屋をきれいに片づけ、香を炷たいて待つて

いた。この屋敷には梅の木が多かった。とりわけ隠居所の前には

亡きあるじ三郎左衛門が「蒼そうりゆう竜」と名づけた古木があつて、

佶きつ屈くつとした樹ぶりによく青苔あおこけがつき、いつも春ごとにもつと

も早く花を咲かせる。いまもまだほかの梅は蕾つぼみがかたいのに、こ

こではもう梢こずえのあちらこちら、やわらかくほころびかかっている

のがみえた。ぬれ縁から部屋の畳一帖ほどまで陽がさしこんでい

た、微風もなく晴れたうらかな朝で、いかにも春の近いことを



思わせる暖かさだった。加代はきちんと坐り、膝ひざの上に重ねた自分の手をじっと見まもっていたが、一睡もしなかつた疲れがしだいに出てきて、ともすれば気が遠くなりそうなほどのねむけに襲われた。

「昨夜お詠みなすつたのはこの寒夜の梅というのですか」

十枚ほどある短冊をゆっくりみていたかな女が、さいごの一首をつくづく読んでから云った。

「……はい」

「みごとにお詠みなすつたこと、本当に美しくみごとなお歌ですね」

「お恥ずかしゆうございます」

「僅かなあいだにたいそうなご上達です、これだけお詠めになればもうおんなのたしなみには過ぎたくらいでしょう」

かな女は短冊をしずかに置き、やさしく嫁の顔を見やりながら云った。

「もうお歌はこのくらいにして、またなにかほかの稽古ごとをおはじめなさるのですね。さあ、こんどはなにをなすたらよいかしら……」

## 二

加代はいっぺんにねむけから覚めた。歌稿をみたいと云われた

ときの不安な予感があたらしくよみがえり、おそれていたことがやはり事実となつてあらわれたのを知つた。

「お言葉をかえすようではございますけれど、もうすこしお稽古を続けさせて頂けませんでしょうか、まだ道のはしも覗いたようには思えませぬし、ようやく字数を揃えることができるようになったばかりでございますから」

「それでも噂うわさに聞くと、あなたにはもうすぐ許可がさがるそうではありませんか、それだけ上達すれば充分です。あなたはからだがあまarioお丈夫ではないのだから、こんどはすこし薙なぎ刀なたでもおはじめなさるがよいでしょう」

「……はい」

加代はそれ以上なんと云うすべもなく、うなだれたままそつと歌稿をまとめて立った。

直輝がお城からさがつて来たのはもうすつかり暮れてからのちだつた。藩主はんしゅかがかみつなのり加賀守綱紀が在国ちゆうで、ずっと御用が多い

ため下城はいつもおくれがちであつた。風呂からあがり、食しよくぜ

膳ぜんにむかつた彼は、妻のようすが朝とはかくべつ憔悴しょうすいして

いるのに気づいて、昨夜ねむっていないということを思いだした、夜を徹したからといって武家ではそうむざと昼寝をすることはできな、あかし「早く寢所へはいるがよいな」そう云つて、彼は食後の茶もはやくきりあげ、自分は書齋へ灯をいれさせて立った。

四五日はなにごともなく過ぎたが、直輝はやがて妻のようすが

いつまでも沈んでみえるのに気づいた。どこか悪いのではないかとたずねると、そんなことはないと答えてさびしげに頬笑むだけだった。それである夜、そつと妻の部屋へいつてみると、加代は灯のかげで、歌稿を裂き捨てていた。

「どうしたのだ」

ふいにはいつて来た良人を見て、加代はとりちらした反古ほごを慌てて押し隠そうとした。

「お待ち、どうしてそんなことをするのだ」

加代はだまって悲しげな眼をあげ、すがるように良人を見あげた。直輝はその眼をみて事情を了解した。

「母上おっが仰しやっったのか」

「……はい」

「云つてごらん、なんと仰しやつたのだ」

加代はなかなか云わなかつたが、直輝にうながされてようやく先の日のことを告げた。

「わたくし、こんどこそやりとげてみたいと存じました。鼓のときも、茶の湯のときもそれほどではございませんでしたけれど、和歌の道だけは奥をきわめてみたいと存じておりました」

言葉が感情の堰を切つたように、彼女にはめずらしく情の熱した調子で云つた。

「加代はふつつか者でございますから、母上さまのお気に召すようには甲斐性かいしやうもございませぬ、けれども自分ではできるかぎり

をおつとめ申ししているつもりでございませぬし、……からだが弱いためお子をもうけることもできませんし、いろいろ考えますとわたくし」

「もうおやめ、それ以上はわかっている」

直輝はやさしくさえぎった。

「おまえがよい妻だということは母上もよくご存じだ。二千石の家政をとりしきってゆく苦心がどれほどのものか、わしにはわからないが母上にはおわかりになる、おまえほどの若さでよくやって呉れると折にふれては仰しやっておいでだ、ただ母上のご気性が……」

云いかけて直輝はふと口をつぐんだ。

彼は母のひとがらを尊敬している。世にまたとなき母だと信じている、かな女は身分の低い家に生まれ、十六のときこの多賀家へとついで来た、多賀は前田家の重職のいえがらで、父の三郎左衛門は若年寄をつとめていた。育ちが低いのでどうかとあやぶまされたが、かな女は二千石の家政をみごとにきりもりした。その点では賢夫人と名に立つたくらいである。彼はいまでも覚えている、父が臨終のとき、ふと母のほうをふりかえつて、——おまえとは三十五年もひとつ家に住んで来たが、とうとう一度も叱るおりがなかつたな。そう云つてかすかに笑つた。本当に三郎左衛門はいちどもかな女に荒いこえをたてたことがなかつた。そういう母であつたが、ひとつだけどうにもならぬものがあつた、それはもの



に飽きやすい気質だった。老職の妻として教養を身につけたいという気持であろう、家政をとるいとまに茶の湯、華、琴、鼓などという芸事をずいぶん熱心にならった、また生得しょうとくさかしい彼女はその一つ一つにすぐれた才分をあらわして、その道の師たちをおどろかしたものであるが、どれも末を遂げたものがなかった。もう一步というところまでゆくと必ず飽きて捨ててしまった。ではもうやめるかと思うと、つきには絵をやり連歌をならい、詩を勉強し、俳諧はいかいにまで手をのばした、そしてどの一つもついに奥をきわめるところまでゆかずし捨ててしまった。

加賀守綱紀はそのころ天下の名宰相といわれ、文治武治ともにすぐれた治績をあげたが、なかにも学芸には最もちからを注ぎ、名あるきよじゆめいしやう鉅儒名匠を招いておおいに藩風を振興した。新井白あらいはくせ石は加州を「天下の書府なり」と云い、荻生徂徠は「加越能かえつのも三州に窮民なし」と云った。また明の僧高泉みんそうこうせんは文宣王ぶんせんおうの治世に比して「さらに数歩を進めたるもの」とさえ称した。名だかい加賀の能楽も、綱紀の世にしつかりと金沢に根をおろしたのである。

こういふありさまなので、しぜん武家の婦人たちのあいだにも文学技芸がさかんだった。歌会、茶会、謡曲の集いなどがしばし

ば催され、ずいぶんすくれた才媛さいえんもあらわれた。かな女はそういう人々のなかでつねに頭角をぬきながら、なに一つ未遂げたものもなかつたので、——あれだけの才がありながら。とその飽きやすい氣質を惜しまれたものであつた。

加代が多賀家へ嫁して来て三年になる、実家にいたときから鼓をやつていた彼女は、多賀家へ来てからも良人のゆるしを得て稽古をつづけた、しかし半年ほどすると姑しゅうとめのかな女が、もうやめたらどうかと云いだした。——鼓はもうそのくらいにして茶の湯を稽古してごらん。もう少しと思つたけれど、加代は姑のいうままに鼓をやめて茶の湯をはじめた、まえにいちおう道があいているので、進みかたもはやかつたし興味も深くなつたが、また半年ほ

どするとそれをやめて和歌につかせられた。そのころ ちゆういんみち中院通  
みきよう躬卿の門人で すがましず菅真静という歌学者が前田家にめしかかえられ  
 ていた。加代はその門に入ったのである。十一二歳のじぶんから  
しんこきんちよう新古今調の手ほどきをうけていた彼女は、鼓や茶の湯のとき  
 よりかくべつ熱心にまなび、詠草の成績もめきめきとあがった。  
 ——この道こそは奥をきわめてみたい。自分でもそう思い、師の  
 真静もとりわけ親切に指導して呉れた。当時は歌道などにも くでん口伝、  
 秘伝などというものがあつて、それは師の衣鉢 いはつをつぐ者か、よほ  
 ど秀抜なものでないと与えられなかつた、加代のめざましい進歩  
 は、間もなくその奥義ゆるしを受けられるところまで来ていたの  
 である。

こういう反面に、むろん彼女は多賀家の主婦としてりっぱにそのつとめをはたしていた。武家で二千石という大<sup>たい</sup>身<sup>しん</sup>のほうで、家来小者の数も少なくはない、家政のきりまわしも粗<sup>そ</sup>忽<sup>こつ</sup>なことではむつかしいのである、加代は若いけれども姑の指導をまもつてよく働いた。良人に仕えることも貞節だった、そのことは親族のあいだにも評判で、——多賀の嫁は姑に劣らぬ出来者だ。と云われているほどだった、だから直輝も和歌の道だけは、加代の才能を充分に伸ばしてやりたいと思つていたのである。それが、鼓や茶の湯のときとおなじように、またしても母からやめろと云われたと聞いて、彼はすくなからず当惑をし、同時にまた昔からの母の移り気な性質を思いだしたのであった。

母の気性がと云いかけたまま、ややしばらく黙っていた直輝は、やがて妻をはげますように云った。

「ほかの事とはちがつて、おまえの和歌の才だけはかくべつだ、わたしからそれとなく母上におはなし申してみよう」

「でもそれでは、わたくしがお訴え申したようで、悪うございませうから」

「それほど物のわからぬ母ではない、残った草稿は捨てずに置かざらねえぞ」

加代は良人の温かい気持を胸いっぱいを感じながら、裂き残した歌稿をつつましく集めた。

その明くる夜、直輝は隠居所をおとずれた。数日まえから端はぎ

それを綴り縫い<sup>つづ</sup>していた母は、ちょうどそれを仕上げ<sup>ひ</sup>て火熨斗<sup>のし</sup>をかけているところだった、座蒲団を細く小さくしたようなものである。なにがお出来になりましたときくと、加代にやる肩蒲団だと答えた。

「あの寝部屋は冷えますからね、それにあのひとはあまりお丈夫ではないから、……これを肩に当てて寝るといいとおもって」

「それはさぞ珍重に存じましょう」  
云いながら直輝はふと微笑した。

「しかしなんだか話が逆でございますね」

「どうしてです」

「それは加代から母上にさしあげる品のように思われますよ」

「でもあたしは丈夫ですから」

そう云つてかな女も苦笑した。

愛している者でなければ、そういうこまかいところに氣のつく筈はない、母は加代を愛している、直輝はいま眼のまえにそのあかしを見たと思つた、それで和歌のことを話しだした。もう間もなく奥義の允可がさがるというところまでできているのだし、その才能にもめぐまれているようだから、家政に障りのない程度で稽古を続けさせてやりたい、そういう意味のことを、自分からたのむという調子で、しずかに話した。

#### 四



かな女は黙って聴いていた、直輝がすっかり話し終るまで黙っていたが、べつに反対はしなかった。「それもいいでしょう」と云っただけで、すぐにほかの話をはじめた、なんのわだかまりもないさっぱりとした調子だった、直輝は安心して隠居所から出た。

あくる朝だった、直輝が登城すると間もなく、蒼竜がみごとに咲きはじめたから観に来るようにと呼ばれて、加代は隠居所へいった。暖かい日がつづいたためであろう、若枝や梢のほうにふくらんでいた蕾が、およそ四分がた、いつせいに咲きだしていた。

「まあみごとでございますこと」思わず声をあげながら、濡れ縁に坐ろうとする加代を、かな女は部屋へ呼びいれて相對した、そ

れで加代ははつとした、呼ばれたのは梅を観るためではない、姑の眼はいつものやさしいなかに屹きつとした光があつた。——和歌のお叱りだ。そう直感した彼女は、なにも云われないまえからもう胸の塞ふさがる感じだった。

「きようは、わたくしの思い出ばなしを聴いて戴いただこうと思ひましてね」

かな女はしずかに云つた。

「年寄の愚痴ばなしです、これまで誰ひとりうちあけたことのない、恥ずかしいはなしなのです、聞いて呉れましょうか」

「はい、うかがわせて戴きます」

「かた苦しく考えないで、膝をらくにして聴いて下さいよ」

かすかな東風こちが、梅のかおりをほのかにおくつてくる、かな女はそのかおりをきき澄ますようなしずかさで話しだした。

「わたくしが多賀の家へとついで来たのは十六歳のときでした、実家の身分が低く、稽古ごとも思うままにはならなかったのわたくしは本当になにも知らぬ愚かな嫁でした。とついで来てから十年というものは、まるで闇のなかを手さぐりであるくように、やっとその日その日を送っていたようなものです、ただお姑かあさまがお情けのふかいよくお気のつくかただったので、このかたおひとり頼りに一つ一つ家政を覚えたのでした。……そのお姑さまが亡くなって、ひとりあるきしなければならなくなったときは、どんなに悲しく、心細かったことでしょう、しばらくのあいだは

まったく途方にくれてしまいました。そしてこれではならないと立直ったとき、わたくしはこういうことを考えました。それは、老職の家の妻として恥ずかしからぬよう、またとかく狭量になりやすい女の気持をひろくするため、なにかひとつ教養として芸を身につけたいということです、わたくしは良人のゆるしを得て茶の湯をはじめました」

かな女はそこで言葉をきった、そしてそつと眼を伏せ、ややながいことなにか思い出す風だったが、やがてまたしずかに話をつづけた。

「自分の口からこう云つては、さぞさかしらに聞えることでしようけれど、わたくしは茶の湯の稽古でたいそう才を認められまし

た、ほうばい傍輩の噂にもなりお師匠さまからも折紙をつけられるというところまでいったのです。そのとき、わたくしは茶の湯をやめました」

「……………」

加代はじつと姑を見あげた。

「良人も惜しんでくれました、しりびとのたれかれもしきりに続けるようにすすめてくれました、けれどもわたくしはそのときかぎりやめて、つぎにほうしょうりゆう宝生流の笛のお稽古をはじめたのです。……笛のつぎには鼓をならいました、連歌や詩や絵などもお稽古をしました、そのなかには茶の湯のように、人にすぐれた才を認められて、どうかして末遂げるまでやりぬくようにといわれたも

のも一つや二つはありました、でもわたくしはどれにも奥底まではゆかず、九分どおりでやめてしまったのです。世間では、わたくしの才を惜しんでくれました、またわたくしが飽きやすいと云つて笑いました、良人さえも時おりは移り気なことだと苦々しげに仰しやつていました、……加代さん、わたくしが芸ごとをつぎつぎに変えたのは移り気からだと思ひになりますか」

かな女はしずかに嫁の眼を見やり、考える時間を与えるように、一句ずつ区切りながら続けて云つた。

「武家のあるじは御しゆくんのために身命のご奉公をするのが本分です、そのご奉公に瑾きざずのないようにするためには、些いささかかでも家政に緩みがあつてはなりません、あるじのご奉公が身命を賭として

いるように、家をあずかる妻のつとめも身命をうちこんだものでなければなりません。……家政のきりもりに怠りがなく、良人に仕えて貞節なれば、それで婦おんなのつとめは果されたと思うかも知れませんが、それはかたちの上のことにすぎません、本当に大切なものはもつとほかのところにあります。人の眼にも見えず、誰にも気づかれぬところに、……それは心です、良人に仕え家をまもることのほかには、塵ちりもとどめぬ妻の心です」

「……………」

「学問諸芸にはそれぞれ徳があり、ならい覚えて心の糧かてとすれば人を高めます、けれどもその道の奥をきわめようとするようになると『妻の心』に隙ができません、いかに獮との名人でも一時に二兎

を追うことはできません。妻が身命をうちこむのは、家をまもり良人に仕えることだけです、そこから少しでも心をそらすことは、眼に見えずとも不貞をいだくことです」

「母上さま」

加代が、とつぜんそう云いながらひれ伏した、つきあげるような声だった、そしてひれ伏したその背がかすかに顛ふるえた。

「わたくし、あやまつておりました」

「……加代さん」

かな女は頷きながら云った。

「もう仰しやるな、年寄の愚痴がいくらかでもお役にたてばなによりです、そして、その覚悟さえついておいでなら、歌をおつ



づけなすつても結構なのですよ」

しずかに微笑しながら云うかな女の、老をたたんだ顔には些かの翳かげもなかった。武家の妻としての、生き方のきびしさ、そのきびしい生き方のなかで、さらに峻しゅん烈れつに身を持してきたかな女のこしかたこそ、人の眼にも触れず耳にも伝わらぬだけ、霜雪をしのいで咲く深山の梅のかぐわしさが思われる。

「こんなものを作りました」

やがてかな女は、端ぎれを継いで作った肩蒲団をとって、そつと嫁の前に押しやった。

「あなたのお寝間は冷えますから、これを肩に当てておやすみなさい、これでなかなか温かいものですよ」

その日お城から帰った直輝は、妻の顔色が見ちがえるように冴さえ冴さえとしていられるにおどろいた。

「どうしたのだ、なにかたいそうよいことでもあつたようではないか」

そう云うと、加代は胸に包みきれぬよろこびを訴えるように云つた、「はは上さまから頂戴ものをいたしましたの」

「……なんだ」

知ってはいたが、わざと直輝はそう訊きいた。

「肩蒲団でございます、ご存じではございませんでしょう」

加代はむしろきうきしたともいえる調子でそう云つた、

「やすみますときに、枕と肩との間に当てるものでございますの、

老人の使うものでしょうけれど、わたくしのからだを案じて、はは上さまがご自分で作って下すつたのです」

「それがそんなに嬉しいのか」

「旦那さまにはおわかりあそばしませんでしょうけれど」

加代はそう云いかけ、ふと眼をあげておのれをかえりみるように云った、

「わたくしもはは上さまのように、やがては嫁に肩蒲団を作つてやれるような、よい姑になりたいと存じます」



# 青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1942（昭和17）年10月

※初出時の表題は「梅咲ぎぬ―加賀藩の女性」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 日本婦道記

梅咲きぬ

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>